

# 東日本大震災 岐阜民医連支援ニュース

=こころは一つ、オール民医連で全国の仲間とともに困難を乗り越えよう！=

NO. 26

2011. 4. 28 岐阜民医連支援対策本部

## 渡辺博美看護師メーデー会場で支援報告！

昨日行われた岐阜県中央メーデー会場で渡辺博美みどり病院副看護部長が震災支援報告を壇上から行いました。雨模様の天気が悪く、500名近い仲間が参加していました。また、各種マスコミの取材もたくさん来ており、報告に興味を持たれているようでした。以下、当日の報告内容を掲載します。

「3/11の東北・北関東の大震災。終日マスコミ報道で伝えられたあの日から50日が経ちました。

改めて被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。今も13万人

の方々が無自覚な避難生活を送っております。被災された皆さんに一日も早く笑顔が戻ることを心からお祈りいたします。

民医連は歴史的に、各地の災害支援にいち早く、全国から駆けつけています。岐阜からも16年前の阪神淡路大震災以降・中越地震・石川の水害に駆けつけました。今回もすぐにでも出かけたかったと申し出る職員もいましたが、あまりにも広範囲なこと、余震もあって二次被災の可能性もあり、更に原発の被害が明らかになったので、全日本民医連の指示を待って第1陣として3/15に出発しました。福島付近を避けてガソリン事情のいい日本海側から向かったので、新潟で1泊して、片道1100kmの道のりでした。宮城県塩竈市にある坂総合病院は岐阜で言うと市民病院か日赤病院くらいの大きさです。海岸から3~4kmのところにありましたが、高台にあったのが幸いし、津波の被害を免れました。宮城県の災害拠点病院にもなっており、自家発電、自家水道を持っていたことから、当日から医療活動を始めることができました。



当日は200名を超える救急患者がやって来たそうです。院内のあらゆる場所に簡易ベッドを作り、トリアージという重症度に応じた対応を、不眠不休で行ったそうです。海沿いにあったデイサービスセンターの職員と利用者さんが津波の犠牲になりました。職員は自らも被災し、連絡が取れない家族がいる中でも、ガソリン不足で身動きが取れず、病院に泊まり込み1週間たっても自宅に帰れない状況で頑張っていました。

全国からの支援は翌日からはじまり、医師・看護師を中心に毎日150名以

上が支援に入っています。移動も含めた支援の延べ人数は全国で1万人を超えました。今回の震災はいろんな団体が様々な支援活動を行っています。民医連は過去の震災支援の経験を活かして、早くから支援拠点をつくることが出来、医療支援というはっきりした目的があったので、現地に向かうことができました。みどり病院は慢性的な人手不足で、決して余裕があるわけではありませんが、送り出して現場を守っていただいた職員の皆さんにこの場を借りてお礼を申し上げます。

私が入ったのは震災から1週間後。救急外来の支援と避難所周りをしました。

救急医療は落ち着き始めていた頃でしたが、ストレスからくる消化管出血などの病気や、まだ雪が降る気候のなかで低体温症や、子供の喘息で病院に運ばれてくる方が多く、避難所では水が貴重で手洗いが十分できず、インフルエンザや、ノロウィルスの腸炎が流行り始めていました。持病の薬を津波で流され、慢性疾患の悪化から体調を崩す人や、家の片付けをしていて怪我をし、化膿してひどく腫れてから受診する人もいました。在宅で避難している人に物資が届かず、ガソリン不足でスタンド行列が何kmも延々と続いていました。給水車に行列、開いているスーパーに行列、自転車屋に行列など街中あちこちで、いろんな行列ができていました。地震や津波が襲った午後3時という時間は一番家族がバラバラに過ごしている時間帯で、子供は学校、お母さんはパートに出ている、お年寄りはいきサービスに行っている等、それぞれ別々の場所で被災し、病院に安否を確かめに来る人もいました。

実質二日間の滞在で、私が行ったことはほんの少しです。「何かしたい」と思って行きましたが、目の前の被災者の方たちは、「岐阜から来てくれたの。ありがとう。頑張っただね。」とまで言葉をかけてくださいました。東北の方は我慢強いし、黙って耐えているという感じで、かける言葉が見つかりませんでした。時間の経過と共に少しずつ支援の内容が生活支援へと変わってきています。避難所にいる人たちは昼間には自宅の片付けに行っています。少し暖かくなりましたが、粉塵や、アスベスト等新たな問題も発生しているようです。介護職員が、夕方避難所で足浴をさせていただいた方は「本当に気持ちが良い。」とおいおいと声を上げて泣かれたそうです。子供達が精神的に不安定になっているという話も聞きます。これからも長期的な支援が必要です。

この支援で強く感じたことは人と人とのつながりです。避難所から運ばれてきた一人暮らしのおばあさんは耳が遠く、津波が来ることを知りませんでした。近所の人に「ばあちゃん！とにかく逃げろ！」と引っ張られるようにして避難したそうです。隣に誰が住んでいるのかわからないような所では、行方不明の人さえわからないでしょう。土地柄なのか町の住民の強いつながりを感じました。それと、支援に入った坂総合病院には地域住民からの絶大な信頼が寄せられていたことです。災害拠点病院という規模の大きさはありますが、非常事態であるというだけではない何かを感じました。それは普段の医療活動に対して地域からの信頼を得られているということではないかと思えます。そして全国から駆けつけた医療介護の仲間のつながりです。遠くは沖縄からも、すでに来ていましたし、福岡は震災の翌日に車で出発して、帰りのガソリンがないので、山形に車を置いて飛行機で帰ると言っていました。熊本の事務の方は行ったり来たりができないので、1ヶ月の予定できていると言っていました。今まで、いろいろな集会や会議で、全国の仲間に出会うことはありましたが、短い時間だけど、みんなが同じ目的で、一緒に仕事をしたというのは初めてでした。そして、自らが被災しながらも笑顔で、思いやりの気持ちを持って接している現地のスタッフの姿に感動しました。

東海大地震もいつ起きるか分からないといわれています。いつ私たちが被災者になるかもわかりません。是非自分の周りのつながりをもう一度見つめ直してください。

私はこの地で見た光景とこの地で出会った患者さんや、仲間を一生忘れることはないと思います。岐阜民医連では引き続き支援を行っていきます。現在までで、25名の職員が現地に赴き、支援を行ってきました。みなさんも何かしたいという想いは同じだと思います。被災地でなくてもできることがあります。連帯して頑張りましょう。」

**5月2日現在の義捐金集約:3,465,444円です**